

カルチャー・ショック 日本人のみた外国

米国立公文書館

松本はる香

アメリカ合衆国の首都ワシントンDCの米国立公文書館（ナショナル・アーカイブス）は膨大な歴史的史料を所蔵する世界屈指の情報源である。収蔵品には政府関係文書、マイクロフィルム、地図、写真といった数々の貴重な史料が含まれている。とりわけ冷戦期の外交史を専門とする筆者にとって、未だ日本国内で外交文書公開が必ずしも進んでいない現状からすれば、そこはまさに「宝の山」である。なにしろ同公文書館に足を運べば、原則として現在より二五年以前のものであれば、例えば日米・米中政府間の外交交渉議事録や、国務省や国防総省の関連外交文書等を誰でも実際に手に取って見ることができのだから。いささか大袈裟な言い方かもしれないが、ここを訪れた外国人は、アメリカの民主主義の延長線にあるとも言える、同公文書館における情報公開の透明性の高さと、知的好奇心の追求を尊重するリベラルな風潮に対して、少なからず「カルチャー・ショック」にも似た感銘を受けるに違いない。

米国立公文書館は、首都ワシントンDC中心部のアーカイブスIと、メリーランド州カレッジ・パークのアーカイブスIIからなり、実際には所蔵史料の大部分は後者に集約されている。ワシントンDCの公文

書館前から出発するシャトルバスに乗って小一時間ほど行くとカレッジ・パークにある公文書館に到着する。その公文書館は白い大きな近代的な建物で、広大な林のなかにひっそりとある。入口でセキュリティ・チェックを受けて荷物をロッカーに入れた後、吹き抜けの天井と大きな窓のある閲覧室へと足を運ぶ。この閲覧室には自分の家系図を調べに来るアメリカの一般市民から、博士論文執筆のための調査を行う大学院生、さらには遠く外国からやって来る歴史マニアや学者まで、実に世界各国から多種多様な人々が集まってくる。

閲覧室のなかにある小部屋の棚に置かれている無数のファイル群から時代と分野によつて閲覧したい史料を絞り込んでいく。わからない場合は、公文書館のアーキビストに相談することもできる。奥の部屋で歴史編纂を続けるアーキビストたちは、各々専門分野を持っており、史料閲覧のための細かい相談にも丁寧に応じてくれる。筆者の顔馴染みであるアジア軍事史の専門家のアーキビストは、五〇年以上も公文書館で働く大ベテランである。たまたま筆者が通っていたワシントンDCの同じ大学の歴史学部出身ということもあってか、閲覧室を尋ねると、さながら下町のお寿司屋さんの

ように「今日はいいいネタが入ってまっせ」と言わんばかりに、最近機密解除されたばかりのCIA史料を見せてくれたりする。特定した史料番号を請求用紙に記入して待つこと約三〇分。書庫から運ばれてきたダンボール箱に入った現物史料の一枚一枚を手にとって読み込む細かな作業が始まる。背の高い雑木林が見渡せる静かな閲覧室に一日中じっとこもつて外交文書を読み続けていると、そこには当時の政策決定者たちの息遣いが感じられて、自分がまるで時空を超えて歴史的一幕のなかに引き込まれてしまったような気持ちにさえなってくる。

また、同公文書館において史料の在処を探し当てたものの、何らかの理由で公開されていない機密文書については、情報公開法（Freedom of Information Act Ⅱ FOIA）を使って機密解除の申請ができる。後日その申請が首尾よく認められれば、数カ月以内に郵便で史料が手元に届けられるという画期的なシステムだ。

いつかワシントンDCを訪れる機会があれば、こんな「カルチャー・ショック」を味わうために米国立公文書館に一度立ち寄ってみることをお奨めしたい。

（まつもと はるか／アジア経済研究所 地域研究センター）